

資料：

新城島のアカムタ・クロムタ祭祀

— 上地のウフプール覚書 —

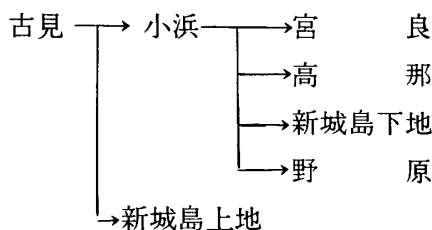
平 敷 令 治

一、はじめに

「アカムタ・クロマタの祭」として知られる八重山の豊年祭についての史料上の初見は、『八重山諸記帳』^①（1768?）である。その中の「島中奇妙」に、

上代古見島三離嶽に猛貌之御神身に草木の葉をまとひ頭に稲穂を頂出現立時は豊年にして出現なき時は凶年なれば所中之人世持神と名付崇来候……………

と記され、更に、“世持神が出現しなくなったため、古見三村では人が神に扮して祭を行なうようになった、”という由来が伝えられている。古見がアカムタ・クロマタの祭の発祥地といわれ、現在、祭を行なっている村は古見・新城島上地・小浜・宮良の四字で、新城島下地では1962年まで行なわれていた。宮良賢貞によると、古見からは次のように伝播したという。^②



岩崎卓爾が『ひるぎの葉』^③（1920）で宮良の祭をとりあげたあと、大正10年（1921）

の一月下旬に石垣島を訪れた柳田国男は同じく宮良のアカムタ・クロマタに言及し、“二色人”と表記してニイルピトは常世“ニイル”から訪れる神であると述べた^④。また、大正12年（1923）に石垣島を訪れた折口信夫は、宮良のアカムタ・クロマタを常世から訪れる“まれびと”としてとらえた^⑤。宮良賢貞は昭和15年に小浜島の豊年祭を紹介し^⑥、河村只雄は小浜島と新城島下地の事例に言及している^⑦。宮本演彦は昭和14年に小浜島の調査を行ない、戦後に二篇を発表した^⑧。

戦後になって綿密な観察記録が発表されるようになった。口火をきいたのは宮良高弘で、『民族学研究』（27-1, 1962）に白マタの写真を添えて発表された論文は八重山の民俗についてあらためて学界の関心をひきつけたのであった^⑨。古見の豊年祭については宮良高弘には他に三篇の論文があり^⑩、1971年には湧上元雄の実地調査に基づく論文が出た。

新城島^{カンジ}上地については、住谷一彦が1963年の調査に基づき二篇を発表したが、宮良高弘と同じくアカムタ・クロマタ祭祀集団を秘密結社として規定し、また、アカムタ・クロマタを来訪神としてとらえることに疑問を投げている^⑪。とりわけ上地の祭祀集団について豊富な資料を用いて多角的分析を試みたのは植

松明石である^⑬。植松が観察したのも1963年の祭らしい。その後1967年に当時沖繩タイムス社八重山支局の記者であった新川明が新城島上地の祭を含めてレポートし、1968年に再度島にわたって祭を見学した上で祭の非公開性を擁護する論陣をはった^⑭。宮良賢貞に同行して1968年の祭を見た三隅治雄はその印象記を書いたが、これより先に祭の歌を収録している^⑮。大城立裕は1968年の祭を見学し、「ばなりぬすま幻想」(『文学界』、1969. 1)を書いた。おそらくアカマタ・クロマタの祭を題材とする小説としては唯一の作品であろう。

1972年7月中旬に沖繩タイムス社では、黒島の民俗芸能・新城島上地の豊年祭・西表島大原の民俗を調査し、八重山の民俗について

理解を深めるという趣旨で、「西表島・民俗行事調査の旅」を企画した。沖繩タイムス社では新城島の豊年祭の見学について、シマの方たちの指示に従って行動することを前提条件に前以て地元の了解を得て、紙上で「旅」への参加を呼びかけたのである。同社の宮城鷹夫編集局次長(当時)を団長とする、職業を異にする28人から成る調査団が、黒島を経て新城島上地に渡ったのは7月29日であった。祭の最後の日(7月31日)に島を離れ、大原に向った^⑯。新城島及び大原では安里真吉区長・大舩久起氏をはじめ、新城出身の方から多くの御教示を戴いた。祭の見学に際し、また、本稿の執筆に際しても主に植松論文(1965)を参照した。

註① 『南島』第1輯(1940)所収。

② 宮良賢貞、「小浜島のニロー神」(『南島』第1輯、1940)。新城島に言及した論文としては他に「根来神「まゆん・がなしい」について」(『沖繩文化』36・37、1971)がある。

③ 岩崎卓爾、「あかまた祭ニ就テノ私見」(『ひるぎの葉』、1920)。

④ 柳田国男、「海南小記」(1921、『定本柳田国男集』第1巻所収)。他に關聯する論文としては、「鼠の浄土」(1960、『海上の道』所収)。

⑤ 折口信夫、「古代生活の研究 常世の国」(『改造』7-4、1925)、「地方に居て試みた民俗研究の方法」(1935、『折口信夫全集』第15巻所収)。關聯論文としては、「民族史観における他界観念」(1952)。

⑥ 宮良賢貞、前掲論文(1940)。

⑦ 河村只雄、『南方文化の探究』(1939)、『続南方文化の探究』(1942)。

⑧ 宮本演彦、「小浜島の穂利祭」(『民間伝承』16-4、1952)、「南島村々の祭」(『南島研究』12、1971)。

⑨ 宮良高弘、「八重山群島におけるいわゆる秘密結社」(『民族学研究』27-1、1962)。

⑩ 宮良高弘、「『赤マタ・白マタ・黒マタ』の祭祀」(『沖繩タイムス』、1963・8・6・付)、「『黒マタ・白マタ・赤マタ』の祭祀—西表島・古見部落の豊年祭—」(『札幌大

学紀要』第1集、1968)、「八重山のいわゆる秘密結社」(『南島史論』、1972)。

⑪ 湧上元雄、「西表島古見むらのプール—黒マタ・白マタ・赤マタの祭祀—」(『まつり』17、1971)。

⑫ 住谷一彦、「アカマタ・クロマタ —八重山印象記・『南海の秘密結社』—」(『みすず』、1964(a))、「南西諸島のGeheimkult—新城島のアカマタ・クロマタ覚え書—」(『石田英一郎教授還暦記念論文集』、1964(b))。

⑬ 植松明石、「八重山・黒島と新城島における祭祀と宗教」(『沖繩の社会と宗教』、1965)。

⑭ 新川明、「アカマタ・クロマタ祭り・八重山」(『沖繩タイムス』、1967・7・22・付)「アカマタ祭りについて—その正しい理解のために—」(『沖繩タイムス』、1968・8・30-8・31・付)。

⑮ 三隅治雄(編集・解説)、『沖繩音楽総攬』(1965)、「アカマタ・クロマタを見て」(『沖繩タイムス』、1968・8・10・付)。

⑯ 大城立裕、『ばなりぬすま幻想』(1972)所収。

⑰ 「現地座談会(仲松弥秀・平敷令治・湧上元雄・宜保栄治郎、司会—宮城鷹夫・徳田安周)新城島『アカマタ祭祀』をめぐる」(『沖繩タイムス』、1972-8・8-8・16・付)。

二、新城島上地の概況

新城島^{カンジ}上地は『一九七一年版町勢要覧』（竹富町役場）によると、石垣市から南へ24kmの洋上に浮かぶ周囲4.48km・面積2km²の隆起珊瑚礁でできた小島である。西南へ400m隔てて、周囲4.02km・面積1.85km²の下地島がある。両島を合わせてバナリ（離れ）という。1964年の一戸当りの耕地面積は4反3畝（17戸の総耕地面積7町4反）であった。主な換金作

年度	農家戸数		耕地面積	1戸当り耕地面積
1964年	稲作	10戸	260アール	26アール
	畑作	17戸	481アール	28.3アール
1971年	畑作	5戸		5アール以下

資料・『1964年農業センサス』（琉球政府）
『1971年沖縄農業センサス報告書—行政区別統計—』（沖縄県統計課）

物は甘蔗であった。しかし、西表製糖KKへの搬入経費・肥料代を差引くと実収はあてにならず、野菜（大根・人参・白菜など）栽培と畜牛への転換をせまられた。稲も全く栽培されなくなり、1971年には5戸の農家（第二種兼業農家）の耕作地は何れも150坪以下におちこんだ。田畑を耕やすことではもはやシマでのなりわいが立たない状況に追いこまれてきたのである。

戦前には粟・甘藷・米・黍が主に栽培されていた。1478年に金斐らがバナリ島に滞在したとき、シマ人は牛・鶏・猫を飼い、黍・粟を栽培し、米はソナイ島（西表島）に渡って求めていたという（『成宗大王実録』）。人頭税制度のもとで、新城村は貢米を課されていたから、海を渡って西表島南風見の大原田の出作を行っていた。金斐らの報告にいう“稲米貿易於所乃島”の貿易がバーターを意味するだけなのか、出作が当時も行なわれていたことを示唆するのかがどうか断定しがたい。南風見への出作だけでなく、王朝時代には上地の島でも稲作を行っていた。しかし、上地

の島での稲作の起源は金斐らの報告にてらしめて16世紀以後ということになる。明治26年（1893）に西表島を踏査した笹森儀助は『南島探験』のなかで、南風見における出作の実情を義憤をこめて次のように記録している。

南風見村ハ戸数九 人口二十九内男十六人女十三人ナリ 其他農夫男女数十人合宿居スルヲ見ル 皆是レヨリ距ル五七里新城島黒島等ノ水田ナキ為メ当村内へ割当田地ヲ耕シ来ルモ此大風雨ニテ食料尽キ困難セルモ如何セン 数日来引継ギ風雨ノ為刳船ノ便ナク空シク滞留セルナリ 噫我カ同胞中ニ己カ居島ニナキ水田ノ貢租ヲ納ル人民アルヲ知ルヤ否ヤ

新城島に対しては貢米・貢布はもとより、ザン（海馬、じゅごん）の乾肉も調として加えられていた。王朝時代にシマ内の田及び南風見の出作田を合わせて、どのように地割りを行なったのかについて徴すべき史料はまだ見当たらない。新城村にとって貢米を確保するための出作が如何に苛酷なものであったかは、笹森儀助の記録の示す通りである。

昭和13年に新城島上地から南風見の大原へ移住が行なわれ^①、戦時中に大原に疎開してそのまま定住した例もあり、字大原は新城の分

表(2) 新城島上地の人口

年 度	字新城(上地)	竹 富 町
1964	99人 (17戸)	7,673人
1968. 5	96人 (17戸)	6,251人
1972. 12	20人 (12戸)	3,944人

資料・『町勢要覧』（竹富町役場）

村の観を呈するようになった。大原の新城出身者は本籍を南風見に移したため、1972年7月末日の新城の本籍人口は僅かに56戸・240

人で、その過半（127人）が石垣市に在住している。

王朝時代には新城の上地・下地の人口が700人を超えたことがあった。1737年には上地に415人、下地に286人が生活していたのである（岩崎卓爾、「鼠の花籠」、1928）。近代に入って上地の人口が300人を下まわることにはなかったといわれるが、1960年代にシマを離れる家族がふえ、1972年7月に筆者らが訪れたとき字新城の区民は6戸28人であった。アカム

タ・クロムタの神を迎えていわう豊年祭も、大原在住者・石垣在住者らが帰島することによって盛大にとり行なわれたのである。祭の二日目（ソーニチ、7月30日）にはシマの人口は500人を超えた。そのうち凡そ100人がよそ者の見学者であった。

新城島上地には現在四つのウガン（御嶽）がある^②。その中で、『琉球国由来記』（1713）に記録されている御嶽はビタケ（上地美御嶽）である。ウガンに齋くニガイピトゥ（神職者）

表(3) ウガン（御嶽）

現代の通称	琉球国由来記 所載の神名・イベ名	備 考
ビタケ (またはナハヤマ)	神名 フチコテダ イベ名 マスキヤアルジ	最高の聖地。アカムタウガンともいう。
アールウガン (またはアールヤマ)		ビタケに次ぐ聖地。集落のアール(東)に位置している。クースクウガンともいう。竜宮の神を祀るといふ。
イルウガン (またはイルヤマ)		クイヌハナヌウガンともいう。大正の初めに、屋嘉部家の拝所が村のウガンとして承認されたといふ。
パンガナス (またはスサブエーヌウガン)		イルウガンよりも後に、白保家の拝所が村の雨乞いのウガンとして承認されたといふ。

表(4) ウガンのニガイピトゥ（1972年7月）

御 嶽	司 を 出 す 家	カンマンガーを出す家	備 考
ビ タ ケ	新家 屋号アールエー (ピサタエーともいう)	大舛家 屋号アールブマセー	
アールウガン	安里家 屋号アールアサデー	新家 屋号アールエー	当時カンマンガーは欠員
イルウガン	屋嘉部家	屋嘉部家 屋号シーウブデー	当時司は欠員
パンガナス			白保家の主人が係りの神役

が決っていて、ビタケ・アールウガン・イルウガンにはそれぞれ司（1人）・フンバギ（1人）・バギ（数は不定）がいる。フンバギ（funbagi）は司の補佐役で、その下役がバギ（bagi）である。司に次ぐ男性神職をカンマンガーという。神職の継承については植松明石のゆきとどいた考察（植松、1965、283—287頁）があるので省略したい。大舛久起氏の御教示によれば、家によって御嶽のマガラ（間柄）は大体決っており、大原の新城出身者について調べると、ビタケ系が15戸、アールウガン系が4戸、イルウガン系1戸、パンガナス系1戸である。“マガラが漠然としている場合”、ビタケに属することになっているという。妻（ニガイピトゥを除く）は夫方のウガンへ所属するし、子は父方のウガンへ所属する。

村落は南北に区分され、二つの集落にはそれぞれパイヌトゥニムトゥ・ニスヌトゥニムトゥと呼ばれる宗家がある。ニスヌトゥニムトゥは宇根家（家号ユムチュー）でビタケのマガラであり、パイヌトゥニムトゥは上地家（屋号カンゼーまたはカミジャー）でアールウガンのマガラである^③。筆者は聴取しなかったが、植松によると（同前、293頁）、アカムタ・クロムタの祭の秘密を保持する家が二家あって、トゥニムトゥやツカサヤー（司を出す家）とは別な家であるという。

註① 牧野清、「島々の概観」（『八重山の社会と文化』、1973）、40頁。

② 住谷一彦は、“ナハおがんは^{ワー}ビタケ御嶽に属し、アールおがんは^{ワー}イシ御嶽に属している”と書いている（住谷、1964⑥、86頁）。拝所のことをオガンといい、御嶽のことをワーというかのような記述であるが、波照間島と異なり、新城島上地では御嶽のことをウガンまたはヤマという。

③ 仲松弥秀琉球大学教授の御教示による。

三 ウフプール

旧暦六月に稲の収穫を祝い、アカムタ・ク

ロムタの神を迎えて予祝を行なう豊年祭を、ウフプール（大きな豊年祭）またはマイプール（稲の豊年祭）という。これに対し、旧暦五月の粟祭をグメプール（小さい豊年祭）またはアプール（粟の豊年祭）という。グメプールにはアカムタ・クロムタの子神を迎える儀礼があり、ウフプールに親子四神を迎える。

ウフプールは旧暦六月の庚のキャンビュール（子・寅・午・酉のいずれか）の日に始まる。1972年のウフプールは7月29日に始まった。当日の朝、沖縄タイムス社の組織した調査団はチャーター船で黒島から新城島上地に渡った。ニス（北の集落）の新家を訪れると、そこでミシヤグ（神酒）・クバン（小魚を揚げたもの）・グシ（泡盛）・餅・スナイ（ぼたんになじんとパパイアの味噌和え）・吸物などの神供がととのえられていた^②。大きなマツコン（椰子蟹）も神饌の一つであった。

午後3時に、宿舎に割当てられた上地小学校の教室で、ザーシンカ（男性祭祀集団）の幹部二人から、祭を見学する者の心得について細心の注意をうけた。内容は次の通りであった。

今日はまもなくお宮で祈願を行なう。更に、浜で祈願した後に、お宮の境内で獅子舞いを行なう。そこまでは見学してよいが、その後は学校の背後の道から北側には絶対に行かないでもらいたい。御嶽に近づかないでもらいたい。

明日は午後6時半頃にアカムターがお見えになる。そのお迎えの催しからは境内に入って見学してよろしい。境内での行事がすんだら帰ってもらう。アカムタが村の中にお見えになる前に、見学者を組分けしてどの家に案内するか決める手筈になっている。小学校に待期していて、案内があれば旗持ちの後について行けば

よろしい。それから後は、村の中を勝手に歩き廻ったり、覗き見は慎んでもらいたい。新城の豊年祭には昔から厳重な戒しめがある。村の同志かよそ者かは態度を見てすぐわかるようになっている。便所に行きたい時でも、必らず係りに申し出てもらいたい。四年前の豊年祭の時には村のしきたりを守らない人がいた為に、皆に迷惑のかかった事故があった。^③

厳密にいうと、島外の人には参加させない祭である。島外の方が来ると、戦前は追い帰したものである。戦後は観光客が多いので、おおかた見せることになった。しかし、アカムタ・クロムタの撮影は絶対禁物である。今日は神も出てこないから、調査団の代表者一人に限って、カンダスも獅子舞いも撮影してよろしい。これも今年から認めることに決ったのである。今晚からは歌の録音も困る。我々自身、歌って覚えるのであり、歌詞を書き写して覚えることすらいけないこととされている。

これから祭が始まれば、その都度、祭がとどこおりなく行なえるよう、見学者の皆さんに協力と呼びかける。指示に従って祭を見学して戴きたい。

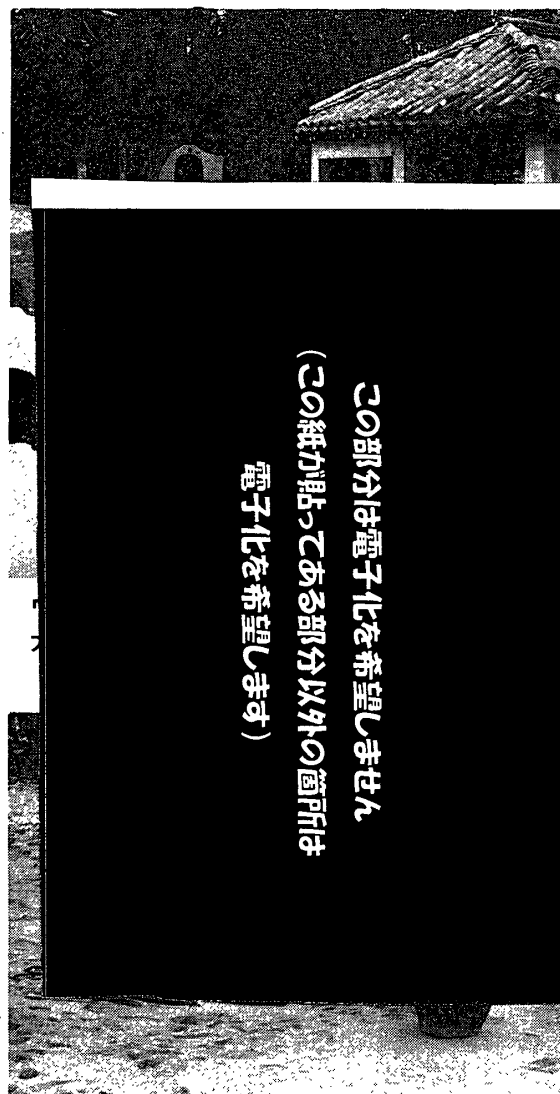
以下のウフプールの経過についての記述は、ザーシンカの指示に従って、見学の許された範囲での観察を主体にまとめたものである。

1. ウバンパジ・カンダス

初日はビタケのパイダイエー（拝殿）におけるニガイピトゥの祈願から始まる。1972年度は午後6時頃に祈願は始まった。拝殿の中での神職者の坐席は御嶽に向かって右側（東側）から、ビタケの司・アールの司・ビタケのフンバギ・ビタケのカンマンガー・バギたちの順である。ニガイピトゥは司以下の神女14人、男性神職4人、計18人であった。拝殿の左側

には、蓆を敷いてウヤニンズ（ザーシンカの長老たち）の坐席が設けられていた。

先ず、ニガイピトゥは拝殿の香炉に線香をともし、神供をそなえて、過去一年間の神の加護を感謝する祈りを捧げた。拝殿の香炉の正面には庭を隔てて、イビに通ずるアーチが建っている。このイビの入口の所をマソーメ（真正面）という。そこにはイビへの御通しの香炉があり、またアーチの手前右側にはイショーダティと呼ばれる高さ1位位の柱石が立っていて、イショ（磯のこと、海の意にもつかう）の神をまつるアールウガンへのお通



マフブニにおけるカンダス。西方の古見に向かって祈りを捧げるニガイピトゥとザーシンカの幹部たち。（撮影・有銘盛紀氏）

しになっている。ビタケの司とフンバギはアーチをくぐり、イビに向った。祈願がすむと、ウサンデーはシマ人だけでなく見学者にも配られた。皿の代用にリュウキュウハスノハギリの葉も利用された。

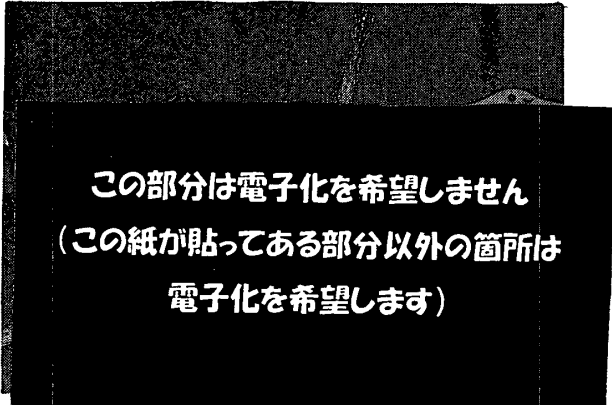
境内から左側（西側）の小径を下ると、マフブニと呼ばれる入江に出る。小径に沿って右側（北側）の御嶽の裾廻りには左繩がめぐらされていた。午後7時頃、長さ2位ほどの大きなタイ（炬火）を担いだ若者を先頭に、ニガイピトゥはマフブニにおりた。白砂の美しい浜におりると、夕陽の映えた西方洋上に小浜島と西表島の北半がひろがっていた。波打ち際から程遠くないところに、蓆を並べ、右（北）の方から順に、神衣裳（白衣）を着たビタケの司・アールウガンの司、クンジーを着たフンバギ以下の神女8人、カンマンガー及びザーシンカの幹部31人、あわせて41人が一列になって、海に向い正坐した。ビタケの司の右前方に、ミシャグ（神酒）の入った大きな甕が据えられ、火口を合わせて三本のタイが置かれた。バタス（ミシャグをいれた木製筒状の容器）一対・カザリビン（泡盛をいれた磁器）一対を飾り、砂を盛って線香を立て合掌したあとで、二人の司はミシャグとグシを三回宛砂の上にこぼした。今年の豊作と村人の繁栄を感謝する祈りがすむと、司とカンマンガーは起立して、西表島の古見岳と南風見の方角に向って礼拝した。

マフブニに於ては、ウバンパジ（願解き）にひき続いてカングス（神迎え）の祈願が行なわれたが、祈願の行なわれているあいだ、聞えてくる音といえば、潮騒と時折りはねるタイの火粉の音だけであった。再び線香をともして二人の司が合掌し、ついで全員が古見と南風見に向って、一斉に三十三拝を行なった。夏の陽がようやく西表島の陰にかくれ、炬火が輝やきを増してくるなかでの敬虔な祈

りの一刻であった。三十三拝に続いて、ビタケの司がグシ・ミシャグを直会し、ミハナ（神饌の米）を一つまみ頭にふりかけた。順次、全神女が同じ儀礼を繰返した。これで海の彼方から稲の神アカムタ・クロムタを迎える祈願がすみ、全員薄暮の海に向って正坐したままジラバを歌いだした。大太鼓・小太鼓でリズムをとりながら、カンジラバ・オボヨなど四曲を歌ったのであるが、三曲目のカンジラバの合唱が始まった頃から、ビタケの司から順に一行は再びビタケに戻って行った。ニガイピトゥはそれからトゥニムトゥ及び司の生家におもむき、そこの神香炉に香をたき、随行したシマ人は太鼓に合わせてオボヨを歌うのである。

2. スーパーラス（獅子遣わし）

午後8時頃、神職者はビタケに戻り、ビタケの司はマソーメで、アールウガンの司はイショーダティに向って祈願した。やがて横笛の音が流れ、イショーダティの右手のミラヤー（後述）に通ずる神道から二頭（雄雌）獅子が現われた。ザーシンカの“ハーイーヤ・イ



この部分は電子化を希望しません
(この紙が貼ってある部分以外の箇所は
電子化を希望します)

境内での獅子舞い。アーチには中央に太陽、右側に月が描かれている。

(撮影・有銘盛紀氏)

ーヤ・イヤ”という掛け声に合わせて獅子はたわむれた。シマの婦女子と見学者が家路につく前に、境内では、“これから後は決して御嶽に近づかないように”、携帯マイクを通して

幾度となく注意が喚起された。^④

3. アカムタ・クロムタの出現

この夜、ザーシンカ（ヤマシンカ）はビタケに籠ったのであるが、ザーシンカの歌声と太鼓の音は絶えまなく島の夜空にこだました。小さな島の静けさがよみがえったのは翌朝のアケトラの刻（午前5時前）であった。

ソーニチ（正日）は、いよいよ“猛貌の神”がシマ人の前に顕われ祝福を与える日である。午後4時頃からビタケでザーピラキ(za:piraki)が始まった。カンマンガーは拝殿にとどまり、神女たちは全員マソーメの所にぬかずいた。神饌を供えて合掌したあと、係りの司だちがそれぞれマソーメの香炉・イショードティ・マフブニの方角に向って祈願を行なった。

太鼓が鳴りわたると、シマの子供たちはおののいて大人の陰に隠れた。子供たちはそれが仮面仮装の神の出現を告げる合図であることを知っていた。そこへイショードティの右手（東側）の神道から、全身をやまぶどうで蔽った身の丈け六尺に近いニイルピトゥが姿をあらわした。ファアカムタ（子アカムタ）であった。ついでファクロムタが登場し、交互に間をおいて数回出現した。子神をフサマロ^⑤ともいう。子神は左手に棒を持ち、右手には笞をもっているが、その黒い笞に触れることはタブーとされる。それに触れた子供は大きくならないなどといわれる。

午後7時ごろ、再びビタケとアールウガンの司はそれぞれマソーメとイショードティに向って礼拝する。それから、ヤマカシラ（旗頭）を先頭にアカムタシンカ・クロムタシンカが笛・太鼓に合わせて登場するが、1972年度は各シンカとも33人であった。アカムタシンカの竿の先にはカタナがつけられ、旗には太陽が描かれている。クロムタシンカの竿には二股のホコが飾られ、旗には三日月が描かれている。アカムタシンカは赤い鉢巻を、ク

ロムタシンカは白鉢巻をしめ、双方のパテーツク（ハタムターともいう、旗持ち）だけは特別ないでたちである。境内ではアカムタシンカは東側に、クロムタシンカは西側に並ぶ。そこへファアカムタ・ファクロムタが姿を見せたあとで、ウヤアカムタ・ウヤクロムタが初めてその威容をあらわした。両手に黒い棒^⑥を持ち、それを十字に重ね合わすしぐさといい、その風貌といい、六尺を超えるウヤアカムタ・ウヤクロムタは威厳に満ちていた。子神について親神が退場すると、ザーシンカに婦人も加わって巻き踊りを行ない、午後7時半にビタケの境内における神迎いの儀礼は終了した。係りの人が携帯マイクで、村のきまりを尊重して指示した通りに行動するよう、三度び要請を行なった。

4. アカムタ・クロムタの巡幸

上地小学校に待期していた見学者は午後10時前、2組に分かれ、ゲラモノの先導で一組はニスヌトゥニムトゥへ、他の組はパイヌトウニムトゥへ案内された。北のトゥニムトゥの家筋は大原に移住しているため今では空屋敷である。屋敷の中央に祠があって香炉が安置されている。そこで待期していると、やがて警固役のゲラムヌが棒を叩き鳴らし、早太鼓を打ち、鋭い掛声を発しながら、トゥニムトゥに向ってきた。ヤマブサ2人（二つのシンカから一人宛、ムラブセーともいわれる統制係）について、旗持ちや足袋をはいたアーライリ（この祭でザーシンカに加入を許された者）が入ってきた。そこへ子神が訪れるとナガメウタを、親神が入ってくるとウタングイを合唱する。親神を迎えたあとで、シマの女性たちは旗頭の周りのザーシンカに寄り添い、旗頭をとりまく二つの集団の間で輪唱がくり返される。巻き踊りの時のステップでリズムをとりながら歌うのであるが、娘たちの動作にも次第に熱がこもり、かけ合いが高

調してくると、見学者もついには興奮の渦にまきこまれてしまう。

屋敷庭での儀礼はおよそ15分続く。アカムタは男性でクロムタは女性といわれ、庭での位置はその屋敷に向って常にアカムタが右側（または東側）に立つ。この夜、アカムタ・クロムタの一行は、北のトゥニムトゥ→南のトゥニムトゥ→アサイ→ビタケの司の生家→アールの司の生家→その他神職の家、の順に村の家々を巡る。最後は、長老の家や本家筋など由緒ある家の屋敷を訪れるようである。北のトゥニムトゥに案内された見学者は次にビタケの司の生家へ案内された。そこで南のトゥニムトゥからまわってくる一行を待ったのである。1972年度は15カ所の屋敷を訪れたという。アカムタ・クロムタの来訪を寿ほぐおだやかな歌声、それに続く熱気のこもった歌声は延々午前3時まで村に流れた。

五、アカムタ・クロムタの見送り

もはやアカムタ・クロムタを送る時刻となり、シマ人はビタケの手前の十字路に佇み、ナガメウタを歌い続ける。ファアカムタ・ファクロムタは交互に数回もビタケの入口から姿をあらわしてシマ人の前にたつが、引き返して対面する位置は次第に遠くなり、タイに照らし出されるニールピトゥの^{おもて}面もさだかなくなってくる。それまで姿を見せなかったウヤアカムタ・ウヤクロムタが出現すると、歌声は更に高まる。“わかりぶしゃやねぬ”（お別れしたくはないのです）、“なくなくとわかり”（泣く泣くお別れするのです）、“やんぬゆーゆむちわり”^⑦（どうか来年のユーをもたらしして下さいよう）、と歌うシマ人のほとぼしる思いを受けとめながら、アカムタ・クロムタがビタケの奥深く姿を隠したのは午

前4時前であった。

六、アトヨイ（後祝い）

ザーシンカはタイを校庭に移し、カンジラバ・アトヨイの歌を合唱し、島外からの見学者も円陣に加えて巻き踊りを行なった。午前4時半、最後に長老が“ヨバナオーレ、ヨバナオーレ”（より良き年を！）と歌って三日間に及ぶ祭を閉じた。今ではこの日（三日目）に大原在住者は大原に帰るが、大原では深夜まで、ザーシンカが家々を巡り、首尾よく祭をとり行なうことができた喜びを分ち合う。

註① 今は飯（米）をミキサーにかけ、これに水と砂糖を加えて糞に入れておく。麴は用いない。祭の三日前につくる。

② 戦前まではトゥルツミと称して、ミシャグ・15～49才の男のフダニンに課されるクバン・全住民に課されるグシとハナ、を各戸から持ち寄って神供をととのえた。今では島外のシマ出身者は寄附金を出す。

③ 1968年の祭のときに、聖域に忍びこんでザーシンカの譴責をうけた者がいた。

④ 1960年代に入って祭の見学者がふえ、すでに1968年には携帯マイクを用いて見学者の協力を呼びかけていた（新川明、1968・8・30）。

⑤ 宮良賢貞は、新城島のニールピトゥの神名は“フザローマイ、フンザー”である、と書いている（宮良賢貞、1971）。古見では白マタ・赤マタをフサマラーというらしい（湧上元雄、1971）。新城島上地では子神をフサマロともいうし、カーフサレーともいう。

⑥ 小浜の赤マタ・黒マタは左右の手に三尺ほどの木刀（カタナと称する）をもつ（宮本演彦、1971）が、古見の赤マタ・黒マタについては宮良高弘は右手に矢を持つと記録し（宮良、1972）、湧上はバク（矛）を持つと書いている（湧上、1971）。

⑦ 三隅治雄の録音した「アカマター送りの唄」を参照（三隅、1965）。

四、祭りの性格

アカマタ・クロマタの語義についてはつとに喜舎場永珣・宮良賢貞らが説いたように、

赤面・黒面の意であり、ニールピトゥの仮面の色に因むものと思われる。新城島上地では、アカマタ・クロマタともいうが、一般的にアカマタ・クロムタ^①という。“猛貌の神”が頭に稲穂を飾っていたという記録は、古見のクロマタ・アカマタ・シロマタが稲の豊かな稔りをもたらす“稲の神”であったことを物語る。アカマタ・クロムタの祭りが古見から伝えられたといわれる新城島上地においては、稲の収穫祭（ウフプール）に親神と子神を、粟の収穫祭（グメプール）に子神をまつってきた。アカマタ・クロムタが稲の神でもあり粟の神でもあり、シマ人の守護神でもあると伝承されてきた^②所に、古くは粟が主に栽培されていた島の歴史が反映されている。

ビタケ（上地美御嶽）にはイビとは別にアカマタ・クロムタの神座があり、親神の神座はミラヤー、子神の神座はミラヤーメと呼ばれる。ミラヤーの語義についてはよくわからない。ミラヤーの一角に神々の出現するナビンドーがあるといわれる。そこで、年ごとの豊年祭でザーシンカの中から選ばれたメンバーが神々に扮するのである。仮面は別として、やまぶどうを綴った衣は毎年つくられるから、ナビンドーに仮装神が出現することを“スディワル”という。しかし、こういう表現があることと、アカマタ・クロムタが来訪神として観念されていることとは矛盾しない。植松明石は、“ミラヤアに於て、「ニーレイスク」という手の届かぬ深い土の底から生まれてくる”（植松、1965、290頁）と書いているが、住谷一彦は、

これまでアカマタ・クロマタは、この祭儀にあたって遠くニライ・カナイ（いわゆる常世の国）から来訪する仮面仮装の来訪神であると説明されてきたが、筆

者が新城で調べた限りでは、現地の人々のあいだでは、アカマタ・クロマタは毎年オンプールとムラプールのあいだに誕生すると意識されている。……現実の祭儀の構造は毎年死んで、またよみ返る死と再生の性格でもって特徴づけられている（住谷、1964^③、91頁）。

と述べ、アカマタ・クロマタを来訪神とみなす通説に疑問を投げている。筆者の見聞した限りでは、シマ人の意識（説明）においても、カンダスの儀礼においても、アカマタ・クロムタを古見の方から迎えていたのである。アカマタ・クロムタの来訪神としての性格を否定した上で、死と再生のモチーフを基本的性格とみなす見解には同意しがたい。むしろ、農耕民の穀霊観に顕著な死と再生のモチーフが新城島のプールにも投影されているのではないか、という貴重な提言として住谷説を受けとめたい。来訪神のゆきかう常世の観念について付言すれば、太陽崇拜とニライカナイ信仰とは、伊波普猷が論述した通り（『日本文化の南漸』1939）、必ずしも重なり合っていない^④。“あけもどろのはな”を畏れ敬まうと共に、西或いは南から訪れる神々をまつる事例は八重山だけでなく、奄美にも見られるのである。また、アカマタ・クロムタ信仰と祖霊信仰の間には殆んど関聯性がない（植松、1965、296頁）。

“宮良ニ行ハル、あかまた、川平・桴海ノ猫等ハ動物信仰上亦併セ考フベシ”（岩崎卓爾、1920）というドグマに倣ったものか、折口信夫は宮良のアカマタ・クロマタの祭について、蛇のアカマタになぞらえて、トーテム儀礼であると書き（折口、1935）、戦後になっても沖縄の宗教にトーテム信仰を位置づけ

ようとした（折口、1952）。甚だしい曲解といわねばならない。同じ類型の新城島上地の祭において、アカムタは男性で東（右）・太陽・剣と結びつけられ、クロムタは女性で西（左）・月・鉾で表象されている。動物テーマのシンボルは見当たらないのである。

- 註① このことについては既に三隅治雄が言及している（三隅、1965）。
- ② グメプールの沖繩本島の五月ウマチーのような稲穂祭としての意味があったとしても、それは従属的な意味しか持たなかった訳である。グメプールに出現する子神の仮面はウフプールの子神の仮面と異なるのである。
- ③ 柳田国男は伊波普猷の見解を支持せず、「ニルヤカナヤに至っては、始めからテダの大神の豊栄昇る所」と書いている（柳田、1960）。

五、ザーシンカ

ウフプールの司祭集団はニガイピトゥと呼ばれる神職者たちとザーシンカと呼ばれる男性年令集団から成る。ウバンパジ（願解き）・カンダス（予祝としての願立て）・ザーピラキ（来訪神の顕現）など祭の本質としての祈りはニガイピトゥが主宰し、来訪神を具象化した神遊びをザーシンカが執行するのである。ザーシンカはその関与する祭儀の執行に

先立って、ミラヤーでイニシエーションを行なう。イニシエーションはウフプールの度に行なわれるけれども、ザーシンカには細分化された年令等級はない。それはシュルツのいう三段階年令階層の見られる年令集団である。見習い段階の準構成員を含めると四つの年令階層から成る^①。

サンボへの加入は小学校5.6年生から認められる。もともとはシマ在住者に限り加入が認められたが、1960年代に入って島外に居住するシマ出身者の子弟も加えられるようになったという。サンボとして加入するのは旧暦5月のアープールの時である。ファアカムタ・ファクロムタの神座ミラヤーメーに列席することが許され、ゲラムヌの指示に従がい祭の雑用をひきうける。サンボになって2・3年もすれば、ウフプールの時にゲラムヌ（若者ともいう）として正式にザーシンカに加入し、ウフプールの神遊びに関与しうる。

ザーシンカへの加入には、ユブシウヤまたはハーヌウヤと呼ばれる後見人を立て、親子の契を交わさねばならない。その儀礼をキンブクヨイ（元服祝）といい、旧暦五月中にユブシウヤの家で行なわれる。ユブシウヤにな

表(5) ザーシンカの年令階層

()内の年令は植松明石(1965, 292頁)による

階層の名称	年 令		備 考
	戦前(大正-昭和20)	戦後	
サ ン ボ	12.3~17才	12.3~14.5才 (10~15才)	人頭税制下の正人 下々位 15~20才
ゲ ラ ム ヌ	18~25.6才	14.5~30才 (16~45才)	上位 21~40才 中位 41~45才
ナハイル	25.6~50才	31~55才 (46~59才)	下位 46~50才
ウヤニズ	51才以上	56才以上 (60才以上)	

ることができるのはナハイルハテ・ウヤニズ
のメンバーであり、ユブシウヤがウフプ
ールの時にザーシンカへ推薦する。推薦があ
れば加入を許されるというものではなくて、厳
しい資格審査が行なわれるという^②。1972年度
のアーライリ（加入を許された新参者）の中
には中学生もいたが、戦前は18才以上の者
に限られていたという。1972年度のアーライリは
9名であった。

既に住谷（1964^③）・植松（1965）が明ら
かにしたように、新城島上地においてはザー
シンカへの加入要件は相対年令（年頃になっ
た若者）とパーソナリティである。ひとたび
加入を許されても、常日頃長幼の序をわきま
えず、村人に迷惑をかけるような反社会的行
為は、かつては年ごとの豊年祭でチェックさ
れたといわれる。ザーシンカは祭を執行す
るための年令集団であるだけでなく、日常の社
会統制の機能を併せもつていたのである。今
では14・5才でゲラムヌになるのもおれば、
島外生活の事情などによっては20才を過ぎて
ゲラムヌになる場合もある訳だが、近代以前
に於てはザーシンカへの加入には個人によ
ってせいぜい2・3年のずれがあっただけで、
メンバーシップの選択性はその意味でゆるや
かであり、村の若者は例外なくザーシンカへ
組織されたと思われる。人頭税の重圧に堪え
てシマの生活を維持するためには強力な連帯
が不可欠であり、運命共同の自覚をせまる祭
のたびに傍観者として久しくシマに留まるこ
とは許されなかったに違いない。民族誌に
見える諸民族の年令階梯制には、毎年成人儀
礼（入社式）を行ないながら年令等級を細分
化せずゆるやかな世代別の“三段階年令階層”
を形成している事例があり、また2・3才の
年令差のある若者をまとめて2・3年ごとに

入社式を行ない20あまりの年令等級を区別す
る事例もある。沖縄に隣接した地域での後者
の事例としては台湾のアミ族やパイワン族な
どの年令階梯制をあげることができる^④。

民族誌の記す年令集団においては、成人儀
礼は一般的にいつて成員外の婦女子には秘密
にされている。思春期の若者を隔離したり、
肉体的な試練を課したり、死と再生の儀礼を
通して神話を伝授したり、成人儀礼の内容は
地域によって部族によって多様である^⑤。収獲
祭など祭のときに成人儀礼を行なう事例也多
い。そのときに、神・祖霊・動物トーテムな
どのよりしろとして若者を仮面仮装させる
事例は広く分布しており、メラネシアのアド
ミラルティ島にも見られるし、北米のズニ族
に於ても“秘密のものいみを行ない、神の仮
面を身につけ、笞を持ち子供たちを打つ”の
である(R. Benedict, Patterns of Culture,
1934)。仮面仮装の精霊を迎える習俗は日本本土
の民俗にも顕著である。仮面仮装は超自然的
存在を具象化する世界各地に分布する一つの
表現型(phenotype)であって、石や木を彫刻
して超自然的存在を像どる表現型、聖なる文
字やデザインを石・板・紙片に描く表現型、
との間に信仰上の優劣がある訳ではない。石
像であれ木像であれブロンズ像であれ板片の
文字であれ、信ずる者によって意味付与がな
される。時を定めて訪れ来る神に対しては扮
装して神わざを示し、常住の神に対しては、
石や金属や木で示しうるというにすぎない。

民族学における秘密結社と年令集団との概
念上の区別は、シュルツ・ウェブスター・シ
ュミット・ロウイーらの業績をふまえて、
Notes and Queries on Anthropology (A
Committee of the Royal Anthropological
Institute of Great Britain and Ireland,

Sixth Edition, 1951) のなかで明瞭に示されている。行事が成員外の者に秘密とされる結社体で、しかもそのメンバーシップが選択的であり、加入の儀式を経てまたは財貨であがなうことによって或いは双方の手続を経て得られるような結社体が秘密結社である。戦術を目的とする秘密結社もあれば、呪術的な秘密結社もある。この概念規定は近代市民社会の特定の政治集団や宗教集団またはヤクザ集団などをも包括しうる。年令集団の執行する儀礼にも秘儀はあるが、年令集団のヒエラルキーを支える一般的原理が年令と世代の別であり、年頃の若者に成人儀礼を課して組織を更新するところに秘密結社との相違がある訳である。

新城島上地において、ウフプールにおけるザーシンカの組織的活動の合議過程はもとより、成人儀礼の内容を口外することは絶対にタブーとされている。タブーとされている事柄について訊ねる事は、夫婦間のプライバシーに介入する”行為に譬えられて、予かじめ質問は封じられてしまう。しかし、今ではウフプールの儀礼の多くが公開されているのであって、ザーシンカの秘儀はごく一部分にすぎない。柳田国男は、日本の村落における祭祀を祭と祭礼に区別し、“祭から祭礼へ”推移した歴史的過程を論証した(『日本の祭』1956)。商品の流通・人の交通の拡大は、村落共同体の物忌みをくずし、村の神とは無縁の見物する者も加わり、祭る者と見る者へと分化した祭礼へ変質してきた事実を説いたのである。戦前には沖縄本島に隣接する島嶼においても、シヌグの日にはよそ者をシマへ入れなかったものである。忌みつつしむ場から信ぜざる者を排除するのはシマの信仰に限られているのではなく、権威ある現代の寺社においても同断である。シュルツの規定(H. Shurtz, Alter-

-klassen und Männerbünde, 1902) に従えば、女性を排除しない小浜島の現代のアカマタ・クロマタ祭祀集団は秘密結社の主要要件を欠き、新城島上地のザーシンカはその要件をみたすことになる。しかし、小浜島のアカマタ・クロマタ祭祀集団も、よそ者(信ぜざる者)に公開を忌む儀礼をもっているし、神女の就任・辞任などの儀礼もまた公開されない。筆者は新城島上地のザーシンカに関する限り、それはNotes and Queries on Anthropology (1951) のいうage-setsであり、近代に入ってからその社会的機能が祭祀の分野にせばめられ、イニシエーションもシマの若者の成人儀礼というより祭祀集団への加入儀礼としての色合いを強めてきたと考えている。ザーシンカの統制機能が日常生活にも及んでいたことについてはすでに言及したが、筆者は更に、近代以前には生産組織としての側面もあったのではないかと推定したい。島内の田地と南風見の大原田を含めてフダニン(正人)に土地を配分(地割)する慣行があったとすれば、地割を調整するシマの最高機関としてはザーシンカがふさわしいと思うからである。表(5)に見られるように、ザーシンカの年令階層と人頭税制下の正人(15~49才)の等級とは対応していない。正人の等級は年令集団の組織原理の前には従属の意味しか持ちえなかったのであろうか。

ザーシンカの関与する重要な儀礼が秘密にされていることもあって、アカマタシンカまたはクロムタシンカへの所属(ピキともいうシマガラともいう)の仕方については、南と北のトゥニムトゥ及び植松のいう“祭の秘密を保持する家”とのつながりを含めて不明な点が多い。ザーシンカへの所属とウガン(御嶽)への所属との間には、今は確かに整合性はない。大原在住者の例だと圧倒的にビタケのマガラが多いにもかかわらず、1972年のウ

プールのザーピラキに際し、アカムタシンカとクロムタシンカの数は同数になるように調整されていた。

註① 筆者の示した年令区分は、それぞれ住谷(1964⑥)及び植松(1965)の示した年令区分と異なる。異なるインフォーマントによって異なる年令区分が示されたことになる。

② 折口信夫は、宮良では酉年毎に成年式を行なう、と記録している(折口、1925)。小浜島では、祭の5日前の晩に聖地ナビンドーに於て、入会を申請した青年男女の資格審査が行われるという(宮良賢貞、1940)。また、古見では祭の三日目に入団式が行なわれるという(宮良高弘、1972)。秘儀とされる古見の入団式については宮良高弘が詳細に報告している(宮良、1972)。

③ 岡田謙「年齢階級の社会的意義」(『文化人類学』、1967)を参照。

④ アカマタ・クロマタの出現するプールを初め、県内のシヌグ・ウンジャミ・ワラビミチなどの祭を独特な“秘密結社”の概念で一括して、それとメラネシアの秘密結社との関聯を説いたのは碩学岡正雄である(『日本民族の起源』、1958、73-76頁を参照)。ニライ・カナイに関する先学の業績は別として、プール・シヌグ・ウンジャミ・ワラビミチなどの祭を比較した類型論的研究を他に知らない。更に、中国南部や台湾やインドシナの諸民族における来訪神儀礼については分布状況ですら筆者にはさだかでない。マリアナ諸島を超えた赤道の南の、ラバウルのあるニューブリテン島に近いアドミラルティ島のduk-dukが、ニューギニアからフィジーに至る広大なメラネシアの典型的な秘密結社で、それが“日本一琉球の秘密結社”と差異がないと述べられ、更に栽培民的・母権的な文化成層のメルクマールとして文化史的な位置づけが示されると、筆者の如きただ壮大な高説に想いをよせるのみである。

六、むすび

巨大なヤラブのしげる仄暗い境内で、初めて仮面仮装の“まれびと”に接したときの印象は実に強烈であった。祭りたいもダイナミックな展開を見せた。初日のカンダスと獅子舞いに示されているように、三日間にわたる

儀礼は、幽玄から躍動へ、敬虔な歌から熱気溢れるかけ合いへ、“まれびと”との離別からシマ人総出の巻踊りへ、静と動・緩と急のリズムをくりかえし、村落共同体の求心的場が着実にその力を強めていくのである。序破急の原則のたくまざる演出といい、神女が主体となる久高島のイザイホーとは好対照をなす祭である。しかも、村の人々の見学者に対する態度は毅然としていて、秘儀は秘儀として守り、祭の執行に些かの齟齬も許さなかった。

祭礼化にともなって、たしかに写真撮影・録音の禁止される範囲はせばめられてきた。それに見学者の要請によって、或いは非合法の手段によって、アカマタ・クロマタの撮影禁止のタブーすら破られたことがある。明治末か大正の初めのことなのか年代は不明であるが、鳥居龍蔵が宮良のアカマタ・クロマタを撮影したことは折口信夫が記録している(折口、1935)。河村只雄は昭和13年(1938)に小浜島の豊年祭の調査に出かけ、ていよく断わられてしまった(河村、1939)。その後、昭和15年(1940)7月18日に新城島上地に渡り、午前中は墓を見てまわって“面白いはなれ焼”を拾い、午後を下地に渡って豊年祭を見学した。翌日の夕方、下地の“赤マタ御願”で赤マタ・黒マタが並んでいるところを撮影し、

“赤マタを写真にとるなど下地の歴史始まって以来のことである”と明記している(河村、1942、427-428頁)。古見については、村の了解を得て、宮良高弘が初めて白マタの写真を発表した(宮良、1962)。新城島上地については、1967年に沖縄タイムス社のカメラマンがウヤアカムタ・ウヤクロムタの写真をとった。それが新聞に載せられたために物議をかもした。他に1960年代には、公表しないという約束でアカムタ・クロムタを撮影した研究者がいるという。記録を見ると、上地ではすでに1968年のプールには、見学者を統制するため

に携帯マイクが用いられている。1972年の祭には沖繩タイムス社調査団（筆者もその一員）や他の取材者の申し出により、カンダス・獅子舞いの撮影が容認されるに至った。研究者は“祭から祭礼へ”の移行を促進する先導的役割をはたしてきたといえる。にもかかわらず、たとえ僅かな例外はあるにせよ、特定の儀礼を公開せず、アカムタ・クロムタの撮影・ソニーの録音を禁ずるという原則は頑としてつらぬかれてきたのである。祭をとりおこなう人々の多くは島外居住者である。島を離れたシマ人はウフプールのためには仕事をなげうってでも島に帰るのである。シマの民俗文化の個性というものはそれほど貴重なものである。



**この部分は電子化を希望しません
(この紙が貼ってある部分以外の箇所は
電子化を希望します)**

(撮影・有銘盛紀氏)

竹富町役場に勤務している上地出身のS氏によると(1974年12月26日聴取)、1975年初めに2世帯が島を離れ、今後も島にとどまるのは安里真吉区長の家族と他に一家族だけになるという。新城島下地の場合、1962年末に最後の一人が島を離れ、シマ人のいない下地は那覇の企業家の放牧場に変貌した。小さな島での半農半漁の個性的な生き方をむなしくさせる状況が作り出されてしまうと、シマの共有地がまるごと発見されて囲いこまれるこ

とについて、手続合理性が問われるだけの離島開発が進められていく。下地の二の舞をふみたくない、豊年祭をいつまでも続けたい、と上地出身の大原在住者・石垣在住者は話していた。だが、企業(ヤマハ)の進出をめぐるシマの関係者の中で厳しい意見の対立が生まれている。その間の事情をふくめ、上地の近況についてはすでに武茂憲一がルポ「過疎化の島から」(『新沖繩文学』26、1974・10)のなかで詳細に報告している。上地の全島買上げを許容するか、それとも部分買上げにとどめるかで意見が対立しているようである。シマの存続をはかるためにやむを得ず共有地の一部の売却を決断するに至ったパナリの人々の心情に、ウフプールに凝集されたあの熱烈な連帯を想起せざるをえない。

追記：初校の後で上地出身の安里哲夫氏(現住所・沖繩市字池原)を訪ね、原稿を預けて方言の表記上の誤まりを訂正して戴いた。特に記してお礼を申しあげる。なお、原稿の内容については安里氏は意見を述べることを留保された。